

# 「教員研究報告」

下垣 光（社会福祉学部准教授）

介護福祉士が支援を行う「要介護状態の高齢者の生活」に関する調査

## 介護福祉士が支援を行う「要介護状態の高齢者の生活」に関する調査

下垣 光

下垣 学部教員の下垣です。今回報告するのは、「介護福祉士が支援を行う『要介護状態の高齢者の生活』に関する調査」です。抄録では抜けていて申し訳ありませんが、本学は、厚生労働省から介護福祉学の構築に関して研究することを委託されています。私たちは、その研究の一環の特定研究として、介護福祉学の構築の一部として、この研究プロジェクトを立ち上げています。

その研究をどのように進めていくかというときに考えられた第一のポイントは、平成19年12月に社会福祉士及び介護福祉法の見直しが行われています。厚生労働省から出された介護福祉士の養成課程における教育内容の見直しの中で、教育体系を3領域から考えるところからスタートしています。

それは、スライドにある「人間と社会」と「介護」と「心と体の仕組み」の3領域です。この3領域の説明において、特に、介護の領域に関して大幅な教育内容の見直しというか、強調された点がありました。それは何かというと、三大介護だけではなく、その人らしい生活を支えることを中心に据えていくことが、介護の領域の中で介護福祉士の専門性として強調されるものとして挙げられました。

そうすると、介護の領域においてその人らしい

生活を支えるという場合のその人らしい生活とは何かということが特に問題になってくるだろうと、私たちは考えました。そこで、その人らしい生活を支えるために必要な介護福祉士としての専門的技術、知識をどのように伝えていくのか。介護福祉士が支えていくべき生活とはどのようなものがあるだろうかを考えることが必要ではないかと研究グループで考えて、この研究をスタートしました。

この研究では、特に、介護福祉士が支援を行う要介護状態の生活について、わが国の介護福祉士の領域で要介護状態の対象となる人が最も多い高齢者に調査の焦点を当てて、その対象者が多く生活している特別養護老人ホームの介護福祉士を対象としてアンケートをすることを考えました。

実際の研究方法として用いたのは、ワムネット（WAM NET）での検索です。ワムネットの中で、特に、2012年10月時点での全国の介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）の全6,350施設で働く介護福祉士を対象として調査を行いました。

調査方法は、郵送調査です。一施設に1通というわけではなく、一施設に返送できる調査用紙を3通同封しました。これは、回収率を上げたかったからです。一施設1人だと回収率があまり上

がない可能性もあるので、3通送付しました。実施期間は、2012年11月初旬から11月末までです。

本調査で問題となるのは、要介護高齢者にとっての生活はどういう要素で成り立っているかをそもそも調査項目で挙げていかないといけません。どのような支援をしているのかを考えていくうえで、まずは、要介護状態の高齢者にとっての生活にはどんなことが含まれるのかを考えました。

ちょっと順番が逆になっていますが、まず、文献調査の中で、社会生活や生活科学において挙げられている既存の研究の中で生活の要素の構成項目を挙げました。さらに、予備調査として、主に卒業生を中心にグループインタビューをしました。実践現場で介護福祉士として従事している卒業生に協力してもらい、純粋な包括グループインタビューにはなっていませんが、グループインタビューの形式で意見を聴取しました。

意見の内容ですが、少し見づらくて申し訳ありません。インタビューで挙げてきた内容を、一応説明します。インタビューで挙げてきた内容を、基本的にKJ法的分類で整理しました。

そうしたところ、インタビュー内容は、大きく三つの大カテゴリーが挙げてきました。ちょっとそのまま読み上げます。「生活の中でやりたいこと、譲れない点があり、過ごしたい場所や時、余暇や外出等のゆとり、他者に任せるなどの選択肢を持ち、少しのぜいたくと価値を求め、自己決定で考え、文書や音声で意思を伝え行動する」と少し長い文言になっています。

このカテゴリーの中で意見として多く出てきたものは、やりたいこと、譲れないことが含まれるということや、あるいは、自己選択・自己決定が持っている意味は、生活の中でやはり大事ではないか、それを介護の中で支えていくべきではないかという意見でした。

2番目の大きなカテゴリーとして挙げたのは、「自分の身体発達、年齢に沿ったケアや、適切な状態にするための治療を希望し、他者にADL（日常生活動作）に応じて代行してもらいながら、

すべて充実し満足されていなくても、過去と今の比較から満足して生活する」ということで、基本的に満足された生活という部分が挙げてきた要素です。

当然、これは、適切なケアを受けられるということで、また、時にはADLを代行してもらいながら生活をする生活の中の満足という部分と、それを構成する要素の部分があるのではないかと思います。

3番目の大きなカテゴリーで挙げたのは、「スケジュールを立てて、生活の楽しみにしていることを大切にして、生活にメリハリをつけるなどの活動を行い、充実した気持ちになる」ということです。

これは、生活が充実している、楽しみにしている、メリハリがあることが、要介護状態の高齢者の生活の中でも重要ではないかという意見でした。

また、今言ったことはかなり多くの意見が集まったカテゴリーですが、もう少し少ない意見が集まった中カテゴリーとして挙げられたものは、「人と話すことを楽しみ、他の方法でのコミュニケーションも取り、他者に誘われたり、干渉されたり、他者の希望をかなえる等、他者とともに生活できることを受け入れる」ということです。

これは、主に、在宅よりも施設のメンバーが集まっていたというところがありますが、やはり他者と生活することの持っている意味というのは、特に、施設の要介護高齢者にとっての生活の中で大きな比重を持っているだろうという意見です。

次に、「住む場所によって生活は異なるが、遠慮や我慢をして、嫌な状態でも生活する」、これは少しネガティブなものでもあります。施設高齢者の中では、やはりある程度我慢をしたりする生活という部分もかなり比重を占めるだろうという意見です。

また、「意欲や、余暇時間の質に、施設のスケジュール、人手等の影響を受けながら生活をする」です。これは文章の順番が逆かもしれませんが、必ずしも何でも思いどおりにできる生活ではない

ということです。つまり、施設のスケジュールや、人員態勢の影響がどうしても大きくなりやすいことが、施設高齢者の生活の要素に入ってくるだろうという意見です。

また、中グループで残りの二つで挙がってきているのは、「生活の中でわからないもの、知らないもの、できないものに近付かないで済ませることや、時に手伝ってもらいながらできるように力を伸ばし、チャレンジする」、このように、実は、受け身の生活だけではなくて、一步前に出ていく生活も施設高齢者の中で無視できないものだろうという意見です。

最後の中カテゴリーで挙がっているのは、「できる範囲で炊事、洗濯、掃除などの家事や、自分のことがほぼできて、何もしないという時間を選択し、エネルギーを充電することもできる」です。自立した生活の一步手前の状態という部分の状況も、生活の要素の中に入ってくるのではないかと。

これは中カテゴリーで一番大きなものではありませんが、特別養護老人ホームであったとしてもこれらの生活要素を考える必要があることが示唆されました。

ちょっと戻ります。これらの要素を踏まえて、全部で64項目の質問項目を作成し、これらの先行研究を踏まえた項目が、要介護状態の高齢者の生活の要素として含まれるかどうかという意見を求めました。意見は、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4件法で聞いています。

スライドで表してもよかったのですが、スライドで表すと全然読めない状況にあるので、お手元の抄録の3ページに集計結果とともに全部載せています。64項目がどういう項目で構成されているかは、3ページをご覧ください。

また、調査では、同時に、年齢、性別、勤続年数、介護福祉士の取得年及び取得方法、介護福祉士以外の資格の取得、勤務経験のある事業種別等も属性の調査として採ってあります。

結果の報告です。結果の前にまず回収率ですが、全国6,350施設に3通ずつ郵送しました。従って、

1万9,590通配布したことになり、その中で4,283通が回収されて、回収率は21.9%でした。分析の方針としては、基本的に、生活の要素の「そう思う」の回答傾向を把握して、基本属性、生活要素のクロス集計を行いました。

まず、属性の結果を先に申し上げます。属性の結果として、まず、年代は、20代と30代で全体の60%を占めました。介護福祉士の取得ということで関係を考えると、実務経験がかなり多いものではありませんが、養成校あるいは養成施設等を出た場合では、やはりこれぐらいのパーセンテージの人が多く占めると思います。

性別に関しては、男性が1,573人(36.7%)、女性が2,703人(63.1%)でした。実は、私たちはもう少し女性の回収が高くなると思いましたが、意外に男性に、40%までとは言えませんが、30%を大きく超える回答をいただきました。

勤続年数ですが、6年から10年が1,805人(42.1%)で最多でした。これも、新卒、あるいは取得した直後の人よりも、ほぼ中堅に入った人が大部分であることが、この調査の回答者の傾向であると思います。

また、11年から15年が964人(22.5%)で、1年から5年の915人(21.4%)と同じぐらいでもあります。考えると、つまり、6年以上の人が6割以上を占めるという調査結果です。

介護福祉士を取得した年は当然経験年数と連動してきます。2006年、2010年が1,669人(39%)ですが、2001年から2005年は982人(22.9%)というかたちです。経験年数の観点で考えていくと、介護福祉士の取得と実務経験の両方がかなり高いレベルの人たちが集まっていると考えられます。

取得方法については、実務経験後の国家試験の受験が2,583人で60%を占めていました。つまり、養成校、養成施設の取得者よりも、やはり実務経験の人たちがはるかに多いという現状が、回答傾向の中にあります。2年制の養成校の卒業は、1,316人(30.7%)です。ちょっと数字は挙げていませんが、4年制大学のパーセンテージはかな

り低いという回答者の傾向です。

介護福祉士以外の資格の取得は、74.8%が介護福祉士以外の資格を取得しています。つまりダブル資格が多く現状であります。ただし、介護福祉士以外の資格取得は、社会福祉主事が1,011名(31.5%)なので、ここまでは細かく聞いていませんが、恐らく社会福祉主事の資格を先に取ったあとに介護福祉士を取っている可能性がある人たちがかなりいることが想定されます。

また、介護支援専門員は863名(26.9%)で、これは逆に、多分介護福祉士が基礎資格となってケアマネを取っている人が25%ぐらいいるという今回の調査対象者でした。さらに、訪問介護員が598名(18.7%)で、一つ考えられるのは、これも訪問介護員、つまりホームヘルパーの資格を取得後、介護福祉士を取っています。

ダブル資格の対象者が60%いますが、恐らくこれは、社会福祉主事とか、介護支援専門員とか、訪問介護員、ホームヘルパーのダブル資格辺りが特徴と思います。

興味深いのは、過去に勤務経験のある勤め先で、福祉以外の仕事をした経験のある人が706名です。これは、当然、養成校からそのまま上がってきた人たちが多数ではないので、一度何らかの仕事をしたあとに介護の領域に入ってきた人たちが20%近くいることが、今回の調査対象者の結果でもあります。

本筋の結果内容に入ります。今回、調査を集計するにあたって、お手元の3ページにも載っているように、まず、今回は、基本統計は単純集計で考えることを報告したいと思います。単純集計の中で出てきたことは、「とても思う」と「少し思う」を合わせた上位群ということで、一応、並びとしては、このスライドでは、「とても思う」を上位から並べた内容です。

見ていくと、まず、項目として「最も生活要素に含まれる」と挙がってきたのは、「花や写真を飾って、自分の居場所を居心地よく整える」です。次が、「自分の状態に合った眼鏡、補聴器を使う」、次が、「気候、季節に合わせて服を着替える」、次

が、「生活の中で楽しみにしていることを大切にする」、「テレビやラジオで好きな番組を視聴する」、「自分の状態に合った福祉用具を使う」、「快適な環境で気持ちよく排泄する」、「髪やひげの手入れ、お化粧などの身支度をする」、「生活の中で充実した気持ちになるものを持つ」、「他者、介護者とかかわり、話すことを楽しむ機会を持つ」です。

単純に見ていって、この内容は、生活の中の潤いだったり、あるいは楽しみだったり、また、心地よく過ごすための身支度や排泄の部分が、まず上位に挙げられていました。恐らく、介護福祉士として要介護状態の支援にあたっている人たちにとって、まずこういうことを担保したいと考えていると思います。

これは、逆に言うと、いわゆる三大介護というだけではなくて、その人の持っている心理や、あるいは社会的側面に対する関心もあるとも考えられるし、生活の質の中での潤いという要素を入れていることも考えられる気もします。

次に、「そう思わない」というものを逆に上位から並べていきました。つまり、「あまり思わない」と「全くそう思わない」です。「時に遠慮や我慢をしながら、嫌な状態でも暮らす」、「介護者の人数や影響を受けつつ暮らす」、「年金以外の収入を得る方法を持っている」、「パチンコ、マージャン、競馬などのギャンブルを楽しむ」、「介護者によって技術の上手下手があることを受け入れつつ暮らす」、「生活の中で性的な満足を得る」、「他者やサービスのスケジュールに合わせる」、「自分の生活について、それまでの過去と比較し満足する」等が挙げられました。

例えば、「心ときめく恋愛をする」とか、「パチンコ、マージャン、ギャンブルを楽しむ」は、要介護状態の高齢者の、特に、施設での生活という要素には入らないのではないかという意見が比較的あったと考えられます。

この結果を見たところ、先ほど挙げた属性でかなり特徴的な傾向もあるので、基本属性と生活要素のクロス集計を行いました。報告書を出してい

て全部載せていますが、今日は一部だけ説明します。

まず、基本的な特徴としては、年代で、若い世代とそれ以外の世代の間で若干の違いがありました。また、性別に関しても、男性と女性の間での生活の要素の捉え方に違いがあるものが若干ありました。資格に関しては、先ほどはパーセンテージとしては多数派ではないので挙げませんでした。が、「介護福祉士」プラス「社会福祉士」を持っている介護福祉士の中で、傾向が若干違うところがありました。

中を見ていくと、少し見えづらくて申し訳ありません。20代の生活の要素で入ってきたときに、「自分の生活について、それまでの過去と比較し満足する」とか、「介護者によって技術の上手下手があることを受け入れつつ暮らす」とかの辺りが、ほかの年代に比べると、「そう思わない」という項目にかなり出てきました。

これは、上の赤い色のところが「そう思う」の上位群で、下の青い色のところが「そう思わない」の上位群です。

一方で、50代になって、逆に、「そう思わない」に入ってきたものの中には、「今より力を伸ばし、新しいことに挑戦する」とか、「他者やサービスのスケジュールに合わせる」、「心ときめく恋愛をする」という項目です。特に、「今よりも力を伸ばし、新しいことに挑戦する」みたいな部分は生活要素に含まれないという意見が、若い世代に比べると比較的多いところに特徴があります。

男性と女性の比較です。男性のところではほかの年代に比べて違いがあった部分は、「そう思わない」という回答傾向の中に、「家族や他者の身の回りの世話をする」等が入っています。一方で、女性の場合は、全体傾向にも反映されている「パチンコ、マージャン、ギャンブル等を楽しむ」などが、「そう思わない」というところに入っています。

実は、今挙げたことに代表されるように、クロス集計をやってみると、「そう思わない」に含まれるもので差が出てきやすいのですが、唯一、「そ

う思う」というところで差が出てきたのが、ダブル資格で社会福祉士を持っているところです。それは、生活の中に選択肢があって上位群に入っています。

私たちとしては、恐らく自己決定や自己選択を尊重するという要素の重要性を生活支援の中で重視しているのは、「介護福祉士」プラス「社会福祉士」のダブル資格者の傾向が可能性として示唆されると考えました。

考察です。考察としては、まず「そう思う」の上位項目群から見られることは、自分の状態に合わせた眼鏡や補聴器の使用や、季節・気候に合わせた服の着替えなど、身体機能の低下に伴う日常生活の過ごしやすさは、全体傾向としては多いです。先ほども言ったように、花や写真などを使って自分の居場所を居心地よくするなど、生活を楽しみ、潤いのある生活に関することを上位項目として、介護福祉士の実践の現場の中で重視していることがうかがえると思います。

逆に、「そう思わない」という項目の中では、「時には遠慮し、我慢をしながら、嫌な状態でも暮らす」とか、「介護者の人数の影響を受けながら暮らす」などは、介護福祉士が実現しようとしているその人らしい生活には含まれません。つまり、その人らしい生活から最も遠いものは、どちらかということ、施設側、サービス提供側に合わせた生活をするので、そもそも生活における課題ではないかということが示唆されると思います。

また、現状の日本の特別養護老人ホームだと、ほぼ自立ができないという状況があるので、金銭管理等、あるいはギャンブルを楽しんだりすることまでは支援の対象の生活には含まれないという部分、金銭管理は自分でやることで、そういうことは含まれないという一面も出てきました。

そうなってくると、考察として考えられるのは、支援の対象となる生活というのは、恐らく支援に値する生活ではないかという一面が、改めて示唆されました。「全く思わない」が上位の項目は、高齢者が在宅生活を要介護状態でなく生活している要素が含まれるだろうということ、質の高い生

活、その人らしい生活は、同時に、それを支援する側にとって、要介護状態にある高齢者にとって必要なものよりも、支援するに値する実践可能な生活がイメージされていることが、今回の調査から示唆されています。

ですから、要介護状態の人へのイメージや、個人の価値観、実践の可否など、生活の構成要素との関連を明らかにすることが、介護の中で対象となる生活を考えるうえでは避けられないだろうと考えました。

また、性別や、ほかの資格取得などの経験の影響を考えていくと、介護福祉士の介護の専門性を支える背景要因が、実は、現状の資格取得そのものよりも大きな影響があることも考えられます。背景要因とこの考え方の影響をもう少し分析していきたいと思います。

今後に向けて、生活ということはどう考えていくかについては、実は、これだけのデータがあるので、多変量解析にかけて、生活の要素を分析する因子分析等を行っていきたいと思っています。

また、「介護福祉士の専門性」という自由記述を採っています。かなりの記述が返ってきているので、自由記述のデータのテキストマイニング等

を行いながら、専門性に対するどのような意識を持っているかを明らかにすることと、追加調査の依頼みたいな部分もかけていましたが、100件を超える施設から「追加調査に応じます」とあるので、生活の要素についてのインタビュー調査等もさらに行っていきたいと考えています。

少し駆け足でしたが、私たちの研究グループの報告をここまでにさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

古屋 下垣先生、ありがとうございました。要介護状態というと、どうしても身体機能の低下に支援者の目は向きがちですが、やはりどのような状態になっても、生きる1人の生活者として何が必要かを支援者側も常に考えていくことが必要だと。ただ、一方で、支援者側の支援にかかわるいろいろな価値が、実は、実際の施設でのいろいろなかわりに、またいろいろ影響を与えていると思います。そういった意味では、今回のこの調査・研究が、さらにその後の深まりを得たインタビュー調査等も含めて成果を上げられることを期待したいと思います。下垣先生、どうもありがとうございました。 (終了)